

令和元年度

麗澤瑞浪に学んで



麗澤瑞浪中学・高等学校

Reitaku Mizunami Junior and Senior High School

発刊にあたって

校長 蟹井 克也

この「麗澤瑞浪に学んで」は一年間の生徒の様々な思いや感動などを綴ったものです。毎年六月に行っている「伝統の日・感謝の集い」での発表原稿、生徒寮で開かれる体験発表会での発表原稿、谷川研修や海外修学旅行の感想文など、本校のさまざまな活動のなかで綴られた多くの原稿の中の一部を纏めたものです。

私どもの学校は、創立者廣池千九郎が提唱した道徳科学（モラロジー）に基づき知徳一体の教育を基本理念とし、心に仁愛の精神を培い、国家、社会の発展と人々の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物を育成することを教育目標としています。日常の学校生活のなかで、私たちはこの確固たる教育目標に沿って教育活動を行っているわけですが、その効果の一端を生徒の作品の中から感じとっていただけたら幸いです。

伝統の日・感謝の集い

感謝の難しさ

3年 高木 美緒

私はこれまで何回、ありがとうと口にしたのだろうか。自分が当たり前のように寝て食べている裏で、たくさんの方が苦勞しているということに気づき、きちんと感謝を伝えられている



のだろうか。昨年度、ある日の道徳の授業で、人や物とのつながりについて考える機会がありました。私は、そこで初めて、身の回りのものにもたくさん支えてもらっているから今があるのだと気が付きました。

私は昨年度の春、この麗澤瑞浪に転入してきました。きっかけは父の異動でした。私の父はモラロジー研究所で働いており、以前にもその関係で引越したことはあったので、学校が変わることになったとしても、あまり驚きはしませんでした。ただ中学校に入学して一年、友達も出てこれからもっと楽しくなるという時に、父の異動を告げられたということが悲しくてなりませんでした。切り替えの遅く諦めの悪い私は、当然のようにわがままを言いました。「こんな中途半端なところで違う学校に行くなんて嫌だ。引越さなくて済む方法はないのか」と。しかしそのようなことを言っても父の異動がなくなるわけではありません。母に、「お父さんが単身赴任に行っても生活が不自由になって困るだけだよ」となだめられて、渋々こちらに越してきたのでした。

新年度になって学校が始まって、私はまだ

前の学校や友達のことを忘れられませんでした。そんな人に満足のいく友達ができるわけはありません。家では「なんで私が転校をしなければならなかったのか。それもこれも全部、父のせいだ」と自分の学校生活がうまくいっていないことを、勝手に父の責任にしてみました。

このような日が何日、何ヶ月と続き、自分が嫌になってきたころ、その道徳の授業がありました。自分を中心にして、周りに自分が感謝する人感謝する物の対象を書いていくというものでした。実際に手をつけてみると自分が思った以上にたくさんの方が、自分の周りに書き足されていきました。書き足し終わったそれを眺めているうちに、私は自分がどれだけ多くの人や物に支えられて生活してきたかということに気づかされました。

私が学校生活を送ることができるのは、クラスの間や先生方、何気なく使っている文房具、整備された環境などがあるということ。私が食べていけるのは野菜や肉を育ててくださる方魚を漁って来てくださる方、それらを買ってくださる方など様々な人がつながっているからだということ。私が寝ることができるのは安

心できる家があるからだということ。そして私健康に、何不自由なく暮らすことができるというのも、さまざまなきことを感じたり体験したりできるのも、命をくれた両親のたくさんのお愛によるものだとということ。

私は今頃になって、どうしようもない過去に執着して、無駄なことをしていた自分に気付いたのです。その道徳の授業が終わった後、私の中で考え方が変わりました。まず第一に今あるものに感謝し、それ以上のものを求めないことです。本当は今あることが自体が幸せで、それ以上の豊かさを知らなければそれで十分なのです。しかし豊かさを知ってしまった以上それを求めてしまうのが人間だと思えます。だから、今のままであり続けることに感謝し、続けることで、些細なことでもありがたみが感じられるのではないかと思います。

次に感謝は思うだけでなく、伝える必要があるということ。感謝とはもどかしいことに、心の中で思っているだけでは全く伝わりません。それに加えて、感謝とは身近にいる人であるほど素直に伝えられないものだと思います。よりにもよって、一番感謝を伝えなければならぬ

人には恥ずかしさが勝ってしまい、どうもうまく言えません。そのような時、些細なものや行動にも「ありがとうございます」と言う習慣をつけておくと悩むこともないのかもしれない。私はこの学校に来て、道徳の授業を通してたくさんの方のことを学びました。そして、これからもその学びを行動に変え、普段の生活に活かしていこうと思います。

自他共のより良い未来のために

6年 原 優輝

昨年度の最後の道徳の授業で、一年間に学んだことを振り返る機会があった。そこで私は初回から学んできた授業内容を思い返している最中、ふと、あることに気がついた。それは釈迦・孔子・イエス・ソクラテスといった聖人と呼ばれる人々や歴代の天皇陛下をはじめ新渡戸稲造といった歴史上偉大な人物のことである。これらの人物には、私たちには想像もつかないような困難があったのだが、それを人々の幸せに結びつけてくれた人々である。

そして廣池千九郎先生もその晩年に、日本が戦争を避けて平和を築く方向へ向かうことに奔走した一人であると聞いている。自分にとってはその品性の高さからいって雲の上の存在である。もちろん私はこれらの方々に尊敬している。ただ、一方で彼らには生まれるつき何か特別な才能があったからではないのか、偶然が重なったのではないのか、と少々疑念を抱いていたことは確かである。実際私にとっては、初めは一人の教師に過ぎなかった千九郎先生が、最後には「道徳を科学するという発想から『質の高い道徳』を研究し、それを人類の幸福という視点から教育に生かそうと、私たちの学校を作っただけだと思つていた。しかし今回の振り返りでよくよく考えてみた時、これらの人々はその中に何か特別なものが潜在していたわけではない。自分を高めていこうとする普段の努力があったからなのだ」という考えに行き着いた。

ある日の道徳の授業で先生がこういう話をされた。「私たちは障害物という名の困難や不幸を目の前にしたボールである。その先には今よりもっと良い未来が自分を待っている。しかし

そこへは自分が大きくなって障害物を乗り越えなければたどり着けない。そして自分が大きく



なるには、善行を積み、心の中にプラスを貯めていかなければならない」というものだった。それはつまり自分を高めていこうとする不断の努力が必要だということだ。皆さんの中には不断の

努力と聞いても何をすればよいか見当もつかないという人が多いだろう。そこで私は自分なりに不断の努力とは何かについて考えてみた。

私は不断の努力とは、習慣となつていような挨拶や、身だしなみ、人とのなげない会話など、ごく当たり前の行いに心を添えることだと思ふ。これらにどれだけ真摯に向き合うことができるかだと思ふ。私たち人間はさまざまな行いにある程度慣れてくると、それらに対して真摯に向き合うことができにくくなる。そして、放り出してしまふことさえある。

ここで皆さんにも一度考えてみてほしい。自分分は心を添えた行動ができていたのだろうか。さて、千九郎先生が大切にしていたことの一つである自己反省とはどのようなものだろう。

自己反省とは、どんなことが起きてても自分の道徳的な努力が足りなかったとして反省し、他人を責めることはせず、さらなる心の向上を目指すという考えである。これができるということとは起こった出来事に対して真摯に向き合っているからであり、まさに不断の努力につながっていくのだ。この自己反省を貫き通した、つまり不断の努力を惜しまなかったからこそ千九郎先生

はとても高い徳を身につけることができたのではないだろうか。

こうして不断の努力を続け、プラスを心の中に貯めていくことで自分自身が成長し、障害物乗り越えて視界が広がり、広い視野を持つようになる。すると、今度は自分のことだけでなく相手や他人というように、今までは自分のプラスを貯めるために続けていた不断の努力の対象が、自分から外へ外へと広がってゆく。そしてついには人類、世界の平和のためという私たちの一番理想の方向へ近づいていく。

今、世界各地で紛争が起っていたり、環境問題が起っていたり、それが深刻化しているなど私たちには多くの課題がある。それにもかかわらず、自分や自分の仲間うちしか考えられない人たちがいる。例えばハロウィンなどで騒ぎをして、人に迷惑をかけるような愚かな若者たちである。このような人たちというのはやはり身近なことに對して真摯に向き合う努力をしておらず、狭い視野のまま生きているのだと思う。このような問題に對して、私たちが何かしろのかかわりがあり、責任を伴うと考えたほうが社会に對する目が開かれると思う。他人事のよ

うに構えるのではなく、自分もまだできていないところはないだろうか、自分は何ができるだろうかといったように、まずは物事にまじめに向かつてゆく姿勢を持つことが必要なのではないかと思う。

こういつている自分も完璧にできているかと言われれば、まだ足りないところはたくさんある。怒りやストレスから周りが見えなくなる時もある。それは自分の視野が狭くなっている、自分の心の中しか見えていないからである。そのような中でもなんとか自分に厳しく不断の努力を続けていく必要があると思うし、それはこれから社会に出ていくにあたって必要なことだと思ふ。

私は将来外交官や国際機関で働くことで、国際社会に山積している紛争や国境の問題、移民の問題などの解決に尽力したいと思っている。その中で廣池千九郎の考え方を受け継ぎ、問題の解決に生かしたいと考えている。世界が紛糾している今、必要とされている国際社会で活躍できる人材になるためには、勉学に励んでグローバルな世界で活躍する人間になるということが大切だと思ふ。そのために不断の努力が続け

られることが大切だ。私はそれができる人、つまり自他の幸福のために尽くすことができる人に、少しでも近づくことができるように努力したい。幸せに満ちたより良い世界をつくるために。

寮内体験発表会原稿

寮生活を体験し変わったこと

B 10 寮 1年 永治 花佳

私は兄がやっているからやってみたいという気持ちで寮生活をする決まりました。親元を離れることや、小学校まで暮らしていた便利な故郷とは違い、自然に囲まれた経験したことがない環境に変わることなどを、周りの方々から心配されましたが、自らこの学校に行きたいと意思を伝えて入学しました。しかし大変なことが多く、嫌になる時がありました。ちよつとしたことで揉めごとになったり、自分がやるうとしていたことが上手くできなかつたり。そんな生活の中でも、嬉しかつたり楽しいことがあります。私は入学・入寮してから六ヶ月程しか経っていませんが、寮生活をして前の自分よりも変

われたところがあります。

一つ目は親への気持ちです。入学・入寮する前から兄などに「寮生活をする」と親のありがたみが分かる」と聞いていました。そこまで変わらな
いと思っていました。実際に寮生活をスタート
させると、洗濯・掃除・買い物などのことが大
変で、勉強だけに集中することがあまりできま
せんでした。そこに食事やパート・仕事などが合
わさり、親は今までどうやっていたのだろうか
と思いました。兄の言う通り、親がともありがた
く感じました。また、夏の部活合宿中にも親への
気持ちが変わりました。合宿は高校寮での生活
だったため一人部屋でした。そこで、入寮してか
ら初めてのホームシックになり、夜とても辛か
ったです。いつも生活している中学寮では、友達
がいたり先輩方がいらつしやるため楽しく、ホ
ームシックになることはありませんでした。し
かし、一人部屋となった途端に、寂しさが込み上
げてきてしまい、親と会いたいと思いました。同
じ家で生活していると気づけない親という大き
い存在に気づきました。

二つ目は性格の変化です。私は前まで、はつき
りと自分の気持ちを伝えられず、おとなしい性

格であったと思います。しかし、寮生活では、は
つきりと伝えられないといけません。そのため、
自分の思いを自然とはつきりと伝えられるよう
になり、前より笑うことが増えて明るくなれま
した。私は小学校の卒業文集でも、笑顔が苦手と
書いていたので、前より自然に笑えるようにな
り良かったです。

三つめは勉強に関してです。入学・入寮前から
勉強に対する意欲が変わりました。入学・入寮前
は宿題だけ終わらせればいいと思っていました
が、自ら勉強できるようにになりました。それには
いくつか理由があります。自習時間が生活に入
っていること、学年順位が付き、良きライバルが
できること、スマホ等の誘惑が少ないこと、授業
の予習・復習・メモ・質問が大切とされているこ
と、教科書の授業ではなく、担当の先生の授業で
あること、平均が出るため責任ができること、な
どだと思います。帰省をしても家で自習に集中
できないので、寮生の方が自分にあっているの
だと思います。

三つ以外にも多くのことが変わりました。迷
わずこの学校に入学して良かったと思います。
私はまだ大きな目標を決めることができていま

せんが、麗澤瑞浪で過ごす六年間で決めること
ができ、その目標に向かっていけるようになり
たいです。

この寮で学んだこと

C1寮 1年 那須 康介

僕はこの寮で四月から十月という短期間の内
にさまざまなことを学びました。今回はその中
から三つのことを話します。

一つ目は自分のことを管理することです。こ
の寮に入る前は学校からの大切な連絡や今後の
予定、この提出物をいつまでに出すなどの自己
管理を全て親に任せつきりにしてしまっていま
した。自分でだらしがないと思ったこともあり
ましたが、面倒くさいなと思って自分のやりた
いことを優先してしまいました。そしてこの寮
に入ってからその悪い癖は思いつきり出てし
まい、部活動などの連絡や報告、相談を何回も繰
り返し忘れてしまい、先生に何遍も叱られてい
ました。その度に自分の不甲斐なさに腹が立ち、
本当に悔しかったです。

しかし寮の良い所は、その自分の悪い所を気

づかせてくれる所です。寮に入っていないければ、そのような所にあまり気づきもしないし、直そうともしないからです。入っているからこそ自分の悪い所が明確になり、直そうときちんと頑張れるのだと思います。

二つ目は友達関係です。以前の僕は友達と話している時に、自分の意見ばかり主張してしまったり、相手の気持ちを考えず軽々しく嫌なことを言ってしまったりしていました。この寮でもそのようなことをしてしまったりして、後悔してしまつたことが何度ありました。

しかし、この寮で友達と関わっている内に、時には人の意見に合わせることや、自分の意見だけでなく相手の話もしっかり聞くことが大切だということを知りました。それは大人になつても必要になつてくるなと思いました。

三つめは家族の大切さです。今までは親に反抗したり、兄弟げんかをたくさんしたりと、悪いことばかりしていました。この寮に入つて家族がいない寂しさを感じ、家族と話せる喜び、そしてけんかができるのも幸せなんだと思いました。やっぱり家族がいてくれてこそ僕があると思つし、家族がいるって本当にいいなと改めて思



ました。

寮という場所は嬉しい、楽しいことばかりではありません。辛いこと、悲しいこともあります。しかしそれを乗り越えてこそ成長につながります。その大事な経験をたくさんできる寮は、僕を育ててくれる、もつてこいの場所だと思います。僕は寮に入つて良かったと思えました。

「誰か」になるために

C5寮 2年 北川 魁之介

僕はこの四月から二・三年生寮であるC5寮で生活しています。今まで半年程生活していますが、三年生の先輩の方々は本当にすごいと思います。

まず、この寮では、ほとんどのミスが大きな失敗になりません。例えば、朝の起床の放送が遅れたとします。すると「誰か」が放送をかけて、しつかり朝礼に間に合うことができます。去年、一年生寮では、起床の放送が遅れたことにより、朝礼に間に合わなかったことがありました。他にも、ゴミを捨てる当番の人が、ゴミ出しの日にゴミを出し忘れても、「誰か」が気づき、ゴミが寮内に残ることがほとんどありません。

このようにC5寮では、ミスが起こつても「誰か」がカバーして、大きな失敗になることがほとんどありません。僕はこの「誰か」になりたいです。

まず、その一歩として、自分のやるべきことは確実に、そして正確にできるようにすることが必要だと思います。僕は最低限のことはできて

いると思いますが、自分のスペースの整理など、あまりできていないこともあります。そのようになすぐに改善できるところはすぐに改善したいと思います。それに加えて、このようなことは人に話すことではないと思いますが、トイレのスリッパが乱れていたら揃えることを、誰もいない部屋の電気がついていたら消灯することを必ずしています。この二つのことは今後も続けていきたいです。

「その人がいると、なぜかその組織がうまく機能する」、そんな人間に僕はなりたいたいです。それは、ミスをかバーする「誰か」と同じなのではないでしょうか。寮という組織は、ミスが起こったとき「誰か」がかバーしなければ大きな失敗につながります。その大きな失敗が起こらないように、ミスをかバーする「誰か」になりたいです。そのために、毎日この寮の一員である自覚と責任をもって生活していきたいと思います。

どれだけたくさんの人に
支えられているのか

B11寮 3年 鷺見 和

私は、どれだけたくさんの人や出来事に支えられて生活できているのか。以前の私ならそのようなことなど考えていませんでした。

二年と半年前、私はこの麗澤瑞浪に入学しました。寮に入るといって、他の子よりも早く家を出る決断をし、右も左も分からない私は、不安で一杯でした。そんなとき、支えて下さったのは、先輩方でした。寮のルールや一年生の仕事を、一から十まで丁寧に教えて下さったり、困ったときは助けて下さったりしました。そんな先輩方は私の憧れです。時には厳しく言われ、素直になれなかった私は、内心、なんでそんなことまで言われなければいけないのか分からない時もありました。しかし、いざ三年生となってみると、先輩方の言われていることがよく分かりました。一年も二年も大変だけれど、一番大変なのは、三年生だということがよく分かり、今までの自分は甘い方だったんだと感じました。

私たち寮生は、親と離れていることもあり、近くには友達がたくさんいます。辛いとき、嬉しい時に支えてくれたのは友達です。私は友達に沢山支えられてきました。中には、自分の叶えたい

ことに向けて離れていった仲間もいます。辛くて涙を流した時、隣に居るのは友達で、「あ、私はこの子に支えられているんだ。しっかりしなければ」と強くなれました。私は、寮に入って一生の友達ができました。私にとつて、その子は私の誇りです。

そして、私を一番支えてくれているのは家族です。嬉しいことがあったとき報告したいのは家族だし、辛いときは、「家に帰りたいな」と思ったりします。私の父は、年中無休二十四時間営業のコンビニみたいに多忙で、私が帰省しても帰ってくるのは遅いです。帰省する度に見る父の後ろ姿は頼もしくて、私の学費のために働いている父が格好良く見えました。母は私の良き相談相手です。しんどい時、電話をすると、「どうしたの?」と聞いてきます。やはり母は鋭いものです。仕事も家事も育児もちゃんとこなす母は格好良く、私の憧れです。時々送られてくる妹の写真付きの葉書きや、私にくれたためになる言葉に何度助けられたか計り知れません。弟や妹は帰る度に明るく出迎えてくれて、ケンカもするけれど、やっぱり家族だなあと感じます。

私は、先輩や後輩、友達、先生、家族などに沢

山支えられてここまで成長できました。そのことにはすっかり感謝をし、今まで支えられてきた分、私はたくさんの人を支えたいです。私の名前の由来には、私がいるだけで周りが和んだり、笑顔になったり、そんな人間になって欲しい。と、父と母がつけてくれました。私は、みんなを和ませたり笑顔にして、これからたくさんの人を支えて恩返しをしていきたいです。

半年間の成長

A 4寮 4年 高実 健

私は寮に入る前はとても乱れた生活を送っていました。朝、一人で起きることが出来ず、毎朝親に起こしてもらっていました。そのため、学校に行くのもいつもギリギリで遅刻ばかりしていました。家に帰ってから、勉強はせずにマンガばかり読んでいたので、学校の勉強について行けなくなりました。自分はこのままではいけないと考え、乱れた生活を変えるために、寮生活をすることを決意しました。

初めて寮へ来た時は不安で胸がいっぱいでしたが、寮の先輩方はとても優しく、分からないこ

とを一つ一つ丁寧に教えて下さいました。おかげで、今は毎日楽しく過ごすことが出来ます。

自分が半年ほど寮生活をしてきた中で変わったことは三つあります。

一つ目は時間の使い方です。何か行動をする時は、三分間行動を心掛けるようになりました。そのため、以前よりも時計を見ることが多くなりました。自分にとって最大の課題であった早起きも改善されました。平日は六時半に起きて学校へ行くための準備をするようにしています。夜はテスト週間以外は十一時までに消灯しています。

二つ目は、勉強をする習慣がついたことです。一日三十分も勉強しなかった私が、今では一日二時間近くも勉強するようになりました。それと共に集中力もつき、学校の勉強について行けるようになったので、自分に自信が持てるようになりました。

三つ目は、周りの人への感謝と思いやりです。寮では一人で生活してのではなく、集団で生活しています。従って、自分の行動が周りにどう影響するのか、どうしたら周りの人が気持ち良

く過ごせるのか考えるようになりました。また、周りの人や親へ感謝をするようになりました。しかし、直接感謝を伝えようと思うと恥ずかしいので、葉書やラインで伝えるようにしています。この学校が他の学校に比べて道徳教育を大切にしている学校だからこそ、気づけたのだと思います。この学校に入ることができて本当に良かったです。

このように半年寮生活をしただけで学んだことが多々あります。しかし、未だに克服できていない問題もあるため、残り少ない一学期ですが、出来るだけ改善したいです。

最後に自分がこのような環境で生活できているのは、寮の先輩方、チューターの井上先生、そして、何より親のお陰です。これからもその感謝の心を忘れずに寮生活をしていきたいと思います。

誰かのために

B 3寮 5年 齋藤 愛

麗澤瑞浪の夕礼は、日直の「黙想してください」という号令から始まります。以前は学校の授業開始の黙想と同様、自分の心を落ち着かせるために行ってきました。中学生のころから習慣となっていたので、形だけとなっていたのも事実でした。

今年の一月、寮替えが行われて新体制となった日に、夕礼で先生から、黙想の時に小さなことでもいいので自分以外の誰かのことを祈り、そしてその日にお祈りしたことを「お祈りノート」と題したノートに記入するように言われました。その日から毎日、「明日もクラスのみんなが元気に登校できますように」や、「家族が自転車などの事故に巻き込まれませんように」など、とても小さなことばかりですが続けています。

先日、母にお祈りノートのことを話したら、「小学校1年生の時、毎朝クラスメイトの一人のことを祈っていたよね」と言われました。当時、隣の席だった男子に暴言や暴力をふるわれたことがあったのです。母に泣きながら話したら、「その子のために毎日お祈りしよう」と言われました。その時は、なぜ自分に嫌がらせをしてくる子の、幸せを祈らなければならないのか理解でき

ませんでした。しかし、今やつと、どうして母があの時、あのように言ったのかわかった気がします。いつのまにかなくなった嫌がらせは、祈り



が届いたとは限りません。しかし、私の心のもちようが変わっていたのは事実でした。

今回、お祈りノートをきっかけに、過去の出来

事を振り返り、新しい気づきがありました。気づかせてくださった先生、母に感謝をして、これからも毎日誰かのために祈りたいと思います。

気が付いたこと

テニス部寮 6年 細川 祐希

最上級生となり、自分のことは当たり前に出来るといことが当たり前になりました。自分に余裕が出来る分、後輩に気を配ったり、部屋の見回りをしました。自分がまだ四、五年生の時には気がつきませんでした。いつも先輩が支えて下さっていたのだと感じました。こういう良い伝統が受け継がれているからこそ、自分達のより良い寮生活が実現出来ているのだと思います。

私は、今回の夏帰省の時に、コンビニエンスストアでアルバイトをさせていただく機会がありました。最初は、レジの打ち方や陳列など、分からないことばかりでした。そこで、今自分に出来るゴミ捨てや、カゴ並べ、袋詰めなど、とにかく見つけてやっていこうと考えました。するとオナーの方に

「細川くんは、よく気がついてくれるね」と言われました。他の高校生よりも気がつけて、動けるということでした。私は、自分に来れることを探ただけでしたが、それが「気がつく力」となっていました。寮生活では当たり前だったことをするだけで、他の高校生とは一味違う人材になります。他にも、言葉使いや返事、挨拶、大人との関わり方など、常日頃、学んでいることがこんなにも評価されることなると驚きました。杉江先生に学ばせていただいていることは、社会に出て大切なことだと分かっていますが、実際に働いてみて、改めて大切さを確認することが出来ました。

九月中旬に行われた新人戦団体県予選の時には、保護者の方とお話をする機会がありました。そこで、
「仕事場で採用するなら、そこら辺の高校の生徒より、麗澤の生徒を採るって言っていたのを聞いたことがあるよ」というお話を伺いました。そのように言っていただけのこととは、卒業していかれたOBの方々が、他の学校の生徒よりも気がついて動けるといことだと思えます。これもまた伝統だと感じました。

テニス部寮での生活において、社会に出た時に無駄になることは一つもないと思います。四年生は、やらなくてはいけないことに対して疑問を持つことがあるかもしれせん。しかし、それは自分が社会に出た時にすぐ役に立つことです。今は疑問でも、後から絶対に役に立つので徹底してやってみて下さい。

私達のさせていたでいる寮生活は、他の学校ではなかなか体験できない貴重な時間です。今、自分達がやっていることに自信と誇りを持ってやっていってほしいと思います。

私は、高校を卒業してすぐに社会人となりました。残りの寮生活で「気がつく力」により一層磨きをかけていきたいと思えます。そして、伝統を繋げていけるよう、より良い寮生活を送り、良い影響を与えられるようにしていきたいと思えます。

川村 桜子

七月二十九日、岐阜新聞「仙台中二自殺いじめ認定」「吹田女兒いじめ両親に市長謝罪」「児童虐待」の記事がありました。最近、新聞・テレビでは「いじめ」「虐待」の報道が増えています。また、先日は知多郡の美浜町奥田で留守番をしていた女兒が何者かに襲われるという事件が報道されました。私の祖母の家から車でほんの数分というところで起こった事件でした。私はそういった情報を見たり聞いたりするたびにとても悲しくなります。

岐阜県でも、私が知っているだけで、4月から2件の自殺がありました。つい先日、岐阜市で私たちと同じ中学生が、自らの命を自らの手で終わらせてしまいました。私はこのことを聞いたとき、とてもショックでした。どうすればこんな悲しいことが起らなくなるのか。

報道と実際とはずれがあると聞いているので、原因ははつきりと分かりません。どういういじめがあったのか。誰が関わっていたのかなどは分かるかもしれませんが。しかし、亡くなった生徒の気持ち、思いは誰にも分かりません。自殺しよ

二年生 人権作文原稿

「いじめ」の怖さ

うと思つたほどの辛さも分かつてあげることはできません。誰か気づかなかつたのか。私はクラスメイトのうち、五人くらいは気づいていたと思います。でも、他の人に言えば自分がいじめられるかもしれないから言わなかつたのだと思います。そこがいじめの怖いところだと私は思います。

生きている人にとって、「死」はとても怖いものだと思います。自分が死ぬと考えていても怖いです。でも、自殺を選ぶ人は、もう心が恐怖すら感じず、現在の状況から逃げたい、今の状況の方が恐怖なのだと思います。いじめは、他人の見えない心を殺します。そんなことをしていいはずがありません。絶対そんなことはしてはいけません。

先日リーガルハートというドラマを見ました。そのドラマは銀行員が多額の不良債権を抱え、銀行からは責め立てられ、社長さんは自殺を考へるほどでしたが、出会つた弁護士と奮闘して最後は会社を立ち直らせていくという話でした。その中で弁護士さんが「一本の藁がラクダの背を折る」ということわざを出し、「銀行員の一言がその藁になつてはいけない」と言いました。意

味を知らなかつたので調べてみると、「ラクダの背中に荷物をいっぱい背負わせるのだが、もうこれ以上は重くて無理という状態のときに、一本の藁のように軽いものを大丈夫だと思つて載せてしまつたらラクダの背骨が折れてしまい、結局は全ての荷物が運べなくなつてしまつたことを表現している。限界を超えた状況では、ほんの些細なことでも大事故を引き起こす原因となるという戒めのことわざ」とありました。いじめで追いつめられている人は、たつた一言で？というその言葉で自殺に踏み込んでしまふことがあるそうです。

私たちはさまざまなことでも悩んだり苦しんだりしています。そんな時、人にかける言葉が一本の藁にならないように、いつも意識したいです。いつもと違う、そういう状態の人がいたら、藁をのせるのではなく、半分を背負つてあげられる人になりたいです。簡単にはできないかもしれませんが、そういうふうを考える人たちが少しでも多い社会になれば、きつともつと生きやすい世の中になると思います。これからの世界がもつと生きやすい世の中になり、自殺する人がいなくなる世界になつてほしいです。

三年生 オーストラリア

修学旅行の感想

積極的な会話を

安藤 花温

初めてのオーストラリア。初めてのホームステイ。初めての英語しか使つてはいけない生活。出発前は楽しみでありながら緊張していました。私のホストファミリーはホストマザーと二十歳のホストブラザーと犬と鳥という構成でした。今までに何人も日本人留学生を受け入れてきたようで、すごくフレンドリーでした。でも、私はホストブラザーとの接し方に困っていました。私のホストブラザーはダウン症候群を患っていたようですが、私ができることを知つたのは日本に帰つてからでした。従つて、私はお金の計算をしている私の横で、日本舞踊の曲をかけながらカンフーの真似をして、『This is Japanese culture!!』と自慢気に言つてきたり、ある日突然、私の部屋の前をマイケルジャクソンのムーンスタークで行き来するようになった

り、バットマンのゲームで敵キャラクターをむごい殺し方をして大爆笑しているホストブラザーとなかなか打ち解けられませんでした。

ある日、ホストマザーとホストブラザーがスポーツ観戦に行つてしまい、私はホストマザーの友人の車に乗つて他の日本人がいる家に遊びに行きなさいと言われました。田口君のホームステイ先でした。その家には年下の男の子一人と女の子二人がいました。私は女の子たちとLINEを見たり、一緒にカップケーキを作ったり、学校で面白かったことを話して大笑いしたりして仲良くなりました。文法を深く考えたり、電子辞書を使つたりしなくても自然に英語を話せていました。帰りの車で、ホストマザーの友人が、「あなたの英語はすごい上手。家でももつと自信をもつて話してみて」と言つてくれました。私はホストブラザーとどう接すればいいか相談すると、「彼はとっても優しいから、きつとあなたを笑わせようとしてくれるのよ」と笑顔で答えてくれました。すごくホッとしました。この日からホストブラザーと映画を観たり、ゲームをしたりしてたくさん話すようになりました。そして別れる時には皆で大泣きしました。

私は今回の研修を通して、正確な英語でなくとも良いから積極的に話しかけること、分からないことはすぐ質問し、悩んでいることはすぐ相談することなど、さまざまなことを学ばせていただきました。また、オーストラリアで私はたくさんの人々に出会つて、たくさんのお優しい方に触れることができました。今度は私が海外から日本に来てくださる方々に思いやりあふれるお



もてなしをしたと思います。最後にりましたが、こんな素晴らしい経験をさせていただけしたのは、先生方や家族のおかげです。本当にありがとうございました。この貴重な経験をこれからの生活に活かしていきたいと思えます。

四年生 谷川研修の感想

谷川研修で学んだこと

浦沢 美羽

谷川研修の目的は二つある。一つ目は、廣池学園の創立者である廣池千九郎のゆかりの地を訪問し、その生き方や考え方に触れる。二つ目、規律ある集団行動を通して、お互いの親睦を図り、意義のある学校生活を送る出発点にする。この二つの目的から、この二泊三日で私は、私の課題や心の持ちようは変わり、これからの麗澤瑞浪生としての目標が定まった。

廣池博士の言動で心に残っているものが三つある。一つ目は、博士が生死をさまよう病にかかれた時、博士は自分ではなく、世の人々の人心救済のために自分を生かしてくれと神様に願われたことだ。博士の残り少ない人生は、私たちのために使われたと言っている。二つ目は、大金（今で言う億円程度）を使って谷川に温泉を建設されたことである。学者がここまでのお金を払ってまで、一体誰のために買われたのか。講師の西田先生もおっしゃっていたが、それは私達のためである。三つ目は、筆が持てず、口から声を出すことが不可能なほど苦しい状態にあったまでも人心救済に最後まで努められたことだ。

一文字一文字、首を振るか振らないかで訂正箇所を直し、決して止めようとはしなかった。

こんなに素晴らしい博士が作った学校に入学したことが嬉しく、心から幸せに感じられた。博士は最高道徳のことを、聖人が実行した道徳だとおっしゃられたそう。おっしゃる通り、廣池千九郎とは、真の聖人だった。この方を学べば学ぼう、タイムスリップして実際に会ってお話をしてみたいと思うほど。そんな博士が見守る学校で毎日勉強に励めることがとてもありがた



く、偉大なことだと心から思える三日間だった。先生のおっしゃることをよく聞き、博士のような広い心をもって、今後の学校生活だけでなく人生を楽しんでいきたいと思う。

五年生 台湾修学旅行の感想

台湾修学旅行を終えて

岡野 蓮美

十一月十九日から二十二日に三泊四日で台湾へ行きました。私は、台湾へ行き感じたことがいくつかあります。

まず、私は中学三年生の時、オーストラリア修学旅行で約一週間ホームステイをしました。そのときよりは英語も話せるようになったなど感じました。3年生の時はイエスやノーがほとんどでした。しかし、及人高校の生徒と交流する機会があり、その時は英語でたくさん話すことができ、自分の成長を感じました。

次に、「私たち日本人がいかに恵まれているか」ということです。日本ではお手洗いへ行った時、トイレトペーパーを自由に流すことができます。一方、台湾ではトイレトペーパーを流すことができない場所もあります。台湾と日本では水の事情に大きな差があり、水のありがたさ、そして日本の恵まれた環境に感謝をしなければならぬということを実感しました。

最後に、「台湾人の温かさ」です。

及人高校の生徒さん三人と私たち麗澤生五人で士林夜市へ行く機会がありました。その時に、一人の女の子がタピオカミルクティーを二人で一つつ奢ってくれました。他にも、笑顔でたくさん話しかけてくれました。台湾に滞在していた間、この他にもたくさん台湾人の温かさに触れることができ、感動しました。

この台湾修学旅行で学んだ、他の人への優しさを今後の生活で忘れないようにしたいと思います。また、日本の恵まれているこの環境を少しでも維持していくために、今できることを考え、できる範囲で実践していきたいと思います。この恵まれた環境が当たり前だと思おうのではなく、大切に、感謝しながら生活することを忘れないようにしたいと思います。

六年生 麗澤瑞浪に学んで

利己的から利他的へ

東 桜雅

私はこの麗澤瑞浪高校に入学し、中学時代か



ら成長したと思えることがたくさんあります。その中でも特に成長したと思うことを二つあげたいと思います。

一つ目は他者への感謝です。私はこの学校に入学すると同時に寮生活を始めました。初めは知らない人だらけでとても緊張し、しっかりと

寮生活をこなせるか心配でした。いざ寮生活を始めてみるとやはり同級生や先輩に迷惑をかけたばかりで、よく先輩方に怒られていました。しかし、寮生活を始めて三、四ヶ月と経ち、だいぶ寮生活にも慣れてきたころ、私は自分の出来ていないところを同級生が補ってくれていたことに気がつきました。自分が一人で出来ていると思っていることも実は周囲のサポートのおかげで出来ていたのだとわかり、日々他者に感謝しながら生活することを心がけるようになりました。

二つ目は周りとの人間関係です。寮には三つの学年が住んでおり、先輩後輩の関係が生じますが、後輩は先輩方を敬うことが大切です。他の人はどう考えているのか分かりませんが、少なくとも私はそう意識して生活していました。すると、時間が経つにつれ、先輩方だけでなく同級生や後輩も敬い、敬意を持つて接することが出来るようになりました。中学生のころ私は、人間関係がうまくいかず悩んでいた時期がありました。しかし今思えば、その当時は自分中心で他者を敬うことが出来ていなかったのだと思います。だから、これからの自分のためにも、またこれか

ら関わって行く人を不快にさせないためにも他者に敬意を持って過ごしていこうと思います。

この麗澤瑞浪で、私は利己的ではなく、利他的に動くことが大切だと学びました。それをこれから生活していく上での基本として大事にしていこうと思います。

たくさんの心をもらった

大川 日夏

私は麗澤瑞浪に入学してたくさんの心をももらいました。麗澤瑞浪に入学していなければ私は一つのことについて一つの考え方しかできずにいたと思います。

寮生活に仲間入りしたとき、私はやめたいと思つたことを今でも覚えています。しかし、今では寮に入つて良かったと心から思うのです。寮にはいろんな人がいました。自分と合う人も合わない人も、気難しくて関わりづらい人も、うるさくて時々離れたいと思つてしまう人も。でも出会わなければ良かったと思う人は一人もいません。私が出会った人は私に新しい心を芽生えさせてくれて、成長させてくれたからです。

一人が喜んでうれい顔をすればみんなの顔が明るくなります。一人が悲しんで泣いた顔をすればみんなが寄り添って抱き締めてくれます。集団の中にはその人数分の心があります。それを受け止め合つて、分かち合つて一つになれるのは麗澤瑞浪だからできたことだと思います。そんなたくさんの異なつた心と過ごせた日々は私の最高の誇りであり、宝物となりました。

そしてもう一つ最高の心が入つた言葉を見つけてことができました。それが「ありがとう」です。感謝のことは言われるとうれしくなります。でもここには言つた人も最高の心になれる魔法の言葉があります。それもまた「ありがとう」なのです。「ありがとう」に「ありがとう」で返す。それは寮生活の掟。その掟は寮だけでなく、学校に広まっています。そんなとき掟は心が変わると思います。ただの言葉であり、掟だつた「ありがとう」が、人と人を結んでくれます。そんな素晴らしい言葉で結んでくれた最高の心、つまり友達に出会うことができて本当に幸せです。私の一生の思い出です。

瑞浪市主張大会

今、僕達ができること

3年 岩槻 竜ノ介

僕は二年生の春休みに、家族と三泊四日でイリピンのセブ島に行きました。旅行代理店からもらったパンフレットを見ると、白い砂浜と青く透き通つた海がとてもきれいで、スキューバダイビングやシュノーケリングが楽しめるリゾート地です。

名古屋から四時間ほどで、マクタン・セブ国際空港に到着しました。空港は、近代的なつくりですが、アーチや天井は木造で、南国の温かな雰囲気の出派な建物です。僕は期待を胸にふくらませながら、ホテルに向かうバスに乗りました。ところが、窓の外を見て、僕は驚きました。道端には大勢の人がぐったりと座りこみ、倒れかけた薄汚い屋台や家があり、やせ細つた目つき鋭い、野犬や野良猫があちこちにいました。初めて見る光景ばかりで、僕はぼう然としました。

翌日、ホテルの外を歩いてみると、そこは安全

きれいなホテルの中とは全く違う世界でした。ぼろぼろのシャツを着て、お母さんと一緒に地面に横たわっていた四・五歳の子供二人が僕たちに気付くと、笑顔で近寄ってきて僕が持っていた水が欲しいと、手を伸ばしてきました。どのお店の入り口にもガードマンが立っていて、こうした子供たちが中に入れないようになっていました。

胸が締め付けられました。どうしてここに住む人たちは、こんなに貧しい生活を強いられるのだろうか。帰国後、フィリピンについている調べてみました。

フィリピンは長い間、スペインとアメリカの植民地であったため、この国の土地や資源はこの二つの国に奪い取られ、多くのフィリピン人が彼らの奴隷として働かされ、食べていけないかどうかというギリギリの貧困状態に追い込まれてきました。第二次世界大戦後の一九四六年に独立をしましたが、今でもアメリカが経済的にこの国を支配していて、多くの人が貧困の中に取り残されているのです。

独立後も、アメリカによる経済的な支配が続いていることを示す一つの例として、僕らが日

本で当たり前のように食べているバナナを挙げることができません。日本では年間百万トンを超える量のバナナを輸入していますが、そのうちフィリピン産が約九割を占めています。甘くておいしい色鮮やかなフィリピン産バナナは一年中スーパーで売られています。そのほとんどは、



フィリピンの人達のために米やトウモロコシを作っていた、広大な農地をアメリカの会社が輸出用バナナの農園にかえて、現地の人を安い賃金で雇って生産したものです。また、遠い日本に輸出するバナナには、害虫対策のために大量の農薬が使われているため、病気になって、働けなくなった農園労働者は、家族と一緒に人口の多い都会に移り住み、物乞いやゴミをあさって生きていく人も少なくないということが分かりました。こうした家族の子供たちの多くは学校に通うこともできません。

フィリピンの貧しい人達の生活を知って、僕は日本人としてやりきれない気持ちになりました。自分達の食料を育てる土地を奪われ、貧しくなっていく現地の人々を生んでいる原因が、日本にあるのではないかと思えてきたからです。そして、日本人の食卓が豊かになっていく陰で、こうした悲しい現実があることを僕たち若い世代の日本人にもっと知ってもらいたいと思いました。

フィリピンの他にも、世界には貧しい暮らしをしている人達が大量にいます。今の僕にできることは限られていますが、「このままでいいわけ

はない。何かをすべきだ」と思わずにはいられなくなりました。今回のセブ島旅行での体験は僕の世界を大きく広げてくれました。世の中のことを、自分のこととして考えるのは普通の生活をしている僕達には難しいことでもあります。しかし、「自分のこと」として考え、とらえる。ここそ、今の僕達ができることであり、そういう考えを持った大人が増えていけば、この世の中はもっと良くなっていくと思います。

卒業式 答辞

六年 佐々木桃花

まだ少し冷たい風を受けながら、園内の桜がこれから訪れる桜の季節を今か今かと待ちわびている今日、私たち卒業生は卒業の日を迎えました。この良き日に、私達卒業生のために盛大な卒業証書授与式を挙行していただき、心より感謝申し上げます。

理事長先生をはじめ、校長先生、来賓の方々、在校生からの強い励ましのお言葉は、私たちの心に強く響きました。ありがとうございました。

真新しい制服に身をつつみ、大きな期待と不安を抱えながら、初めて校門をくぐってから、三年または六年が経ちました。今思い返すと、高校三年間はあつという間でしたが、数え切れないほどの素晴らしい出会いや経験がありました。私は恵那市明智町出身です。入学した当初は保育園の頃から一緒だった地元の友達と離れるのが、不安で仕方ありませんでした。しかし、一番に話しかけてくれた友達や、緊張を解いてくれた一貫生、気軽に話しかけてくれたクラスメイト。そして親身になって接して下さる先生方に出会い、不安は吹き飛び、期待で満ち溢れた高校生活が始まりました。

麗澤瑞浪での生活で得られたものは、仲間や先生方と過ごした三年間の思い出だけではありません。「自立」「感謝」「思いやり」の三つの言葉から、高校生活を、そして今後の人生をよりよくする「心」が、様々な経験を通して育まれました。

通学生である私の目には、寮生は一步大人のように映っていました。最初は手探りで、時には涙を流しながらも、親元を離れて集団生活をしている寮生を、私はとても尊敬しています。そん

な寮生の姿を見たり、話を聞いたりすることで、私は本当の「自立」ということを学び、寮生の存在は未熟だった私を一步成長させてくれました。そして、麗澤瑞浪で当たり前に言えるようになった「ありがとう」の言葉。ありがとうを言われた際に「ありがとう」と返すこと、些細なことにも「ありがとう」を添えると、人間関係が豊かになることを学びました。沢山感謝し、感謝されることで、もっと相手のことを思いやる事が出来るようになりました。

「自立」「感謝」「思いやり」から自分の、「心」を成長させることができたのは麗澤瑞浪だからこそ、そして、今まで支えてくださった方々がいたからこそです。

その支えてくださった方々に感謝を申し上げます。同級生の皆さん。三年間本当にお世話になりました。行事だけでなく、日常生活や部活動、通学の時間さえも楽しいと思えたのは皆さんのおかげです。一人一人が前を向き、夢に向かって努力する姿に、私もたくさん刺激を受け、前に進んでいく活力が湧きました。いつまでも皆さんは私にとってかけがえのない仲間です。本当にありがとうございました。

在校生のみなさん。頼りないところもあったと思いますが、私たちにについて来てくれてありがとう。皆さんの存在が励みとなり、時には大きな支えとなりました。三年間、六年間は瞬く間に過ぎてしまいます。皆さんが卒業する日に後悔することがないように、一日一日を大切に、そして仲間や先生方、家族を大切にして過ごして下さい。皆さんの大いなる活躍を期待しています。

そして、親身になってご指導してくださいました先生方。私は毎朝黒板に書いてある、担任の先生からのメッセージを見ることが楽しみでした。そのメッセージで、先生が私たちを本気に思ったださっているということを実感していました。いつも私たちを支え、時には厳しく指導して下さったおかげで、よりよい未来を切り開くことができました。本当にありがとうございました。

最後に、私を一番支えてくれた両親と家族。麗澤瑞浪で学ぶことができたのは、紛れもなく、両親や家族のおかげです。心配をかけたこともありました。いつも応援してくれたので、とても心強かったです。両親や家族のおかげで、本当に素晴らしい経験ができました。麗澤瑞浪に入学させてくれてありがとう。そして、今まで育てて

くれてありがとう。



これから私たち卒業生はそれぞれの道を歩むこととなります。時には壁にぶつかることもあるでしょう。しかし、私たちの未来は前途洋々です。麗澤瑞浪での思い出や学びを胸に、全ての方々へ感謝の気持ちを忘れることなく、明るい

未来へ向かって胸を張って進んでいきます。
名残りは尽きませんが、理事長先生、校長先生、そして私たちを支えてくださったすべての先生方と職員の皆様へ、ご健康とご活躍。そして、愛する母校の益々の発展をお祈りし、心からの感謝の気持ちを込め、答辞とさせていただきます。